

第 68 回名古屋春栄会
演目のあらかし

令和6年7月28日

名古屋春栄会事務局

目 次

羽衣（はごろも）	1
東北（とうぼく）	2
絃上（けんじょう）	3
経政（つねまさ）	4
半部（はしとみ）	6
羽衣（はごろも）	7
鶺鴒（うかい）	8
三輪（みわ）	9
東北（とうぼく）	10
富士太鼓（ふじだいこ）	11
善知鳥（うとう）	12
船弁慶（ふなべんけい）	13
八重桜（やえざくら）	15
加茂（かも）	16
敦盛（あつもり）	17
井筒（いづつ）	18
〔能のミ二知識	19〕

このリーフレットは、第68回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目の記載順は、番組の順です。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

羽衣（はごろも）

【分 類】 三番目物（鬘物＝精天人物） ＊序ノ舞

【作 者】 不詳

【主人公】 シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやってきました。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充満の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

東北（とうぼく）

【分類】 三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：都の女（面・小面）、後シテ：和泉式部の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞[クセ]の部分…下線部）

東国より都へ上って来た旅僧が、東北院の和泉式部の住居跡を訪れます。折から花ざかりの一本の梅の木を見て、感じ入っていると、美しい一人の里女が現れて、話しかけてきます。そして、この梅は、今は「和泉式部」、「好文木」、「鶯宿梅」などさまざまに呼ばれているが、以前ここが上東門院の御所であった頃、和泉式部が植えて、「軒端の梅」と名付けたのだと、その由緒を語り、また、あの方丈は式部の寝所をそのまま残したものであると語ります。そして、花も、昔の主人である和泉式部を慕うかのように、年々に色も香も増して咲き続けているというので、旅僧が感心すると、自分こそ、この梅の主の和泉式部であると述べて、花の陰に消え失せます。

<中入>

旅僧は、門前の者からも和泉式部の物語を聞き、梅の木陰で夜もすから読経します。すると、式部の霊が、ありし日の美しい上臈の姿で現れます。そして、昔、御堂関白藤原道長が、今あなたが読誦している法華経を高らかに誦しながら、この門前を通られるのを聞いて、「門の外 法の車の音聞けば われも火宅を 出でにけるかな」と詠んだが、その功德により、死後、火宅の苦しみをのがれ、歌舞の菩薩になったと語ります。さらに和歌の徳や、東北院の霊地であることを讃え、美しい舞を舞って、やがて暇を告げて方丈に入ったかと思うと、僧の夢は覚めます。

【詞章】（仕舞[クセ]の部分の抜粋）

所は九重の。東北の霊地にて。王城の鬼門を守りつゝ。悪魔を払う雲水の。水上は山陰の鴨川や。末白河の浪風も。潔きひびきは。常楽の縁をなすとかや。庭には。池水を湛えつゝ。鳥は宿す池中の樹。僧は敲く月下の門。出で入る人跡かづかづの。袖をつらね裳を染めて。色めく有様はげにげに花の都なり。見仏聞法の数数。順逆の縁はいやましに。日夜朝暮におこたらず。九夏三伏の夏たけて秋きにけりと驚かす。潤底の松の風。一声の秋を催して。上求菩提の機を見せ。池水に映る月陰は。下化衆生の相を得たり。東北陰陽の。時節もげにと。知られたり。

絃上（けんじょう）

【分類】四・五番目物（貴人物、略脇能） ＊早舞

【作者】不詳（金剛弥五郎？）

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉または三光尉）、
後シテ：村上天皇の霊（面・中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の太政大臣藤原師長は、天下に隠れもない琵琶の名手です。もはやわが国にはライバルはいないと思い、唐（中国）に渡ってさらにその奥義を窮めようと、従者を伴い、都を出て須磨の浦までやって来ます。そこで、一夜の宿を借りた塩屋の主の望みに応じて、師長が一曲弾じていると、にわか村雨が降り来り、板庇を打ちます。すると老夫婦が、苫を取り出して板屋を葺いて調子を整えます。師長はその措置に驚き、音曲に嗜みのある者と見て、一曲を所望します。すると翁は琵琶、姥は琴によって越天楽を合奏します。師長はその神技に感じ、国内に自分より優れた弾き手はいないと思いがったことを深く恥じて、立ち去ろうとします。老夫婦はこれを引き止め、自分達は村上天皇と梨壺女御の霊であり、師長の入唐を止めるために現れたのだと述べて姿を消します。

<中入>

やがて村上天皇の霊が神々しい装束で現れ、龍神に命じて、竜宮に持ち去られた獅子丸の琵琶を取り寄せ、これを師長に下賜します。そして自らも、興に乗じて秘曲を奏で、舞を舞って昇天します。師長は、何よりの土産と名器をたずさえて都に戻ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

獅子には文殊やめさるらん。獅子には文殊やめさるらん。帝は飛行の車に乗じ。八大竜馬に引かれたまえば。師長も飛馬にむちをあげて。馬上に琵琶をたずさえて。馬上に琵琶をたずさえて。須磨の帰洛ぞ。ありがたき。

経政（つねまさ）

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしょ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

さればかの。経政は。さればかの経政は。いまだ若年の昔より。外には仁義礼智信の。五常を守りつつ。内にはまた。花鳥風月。詩歌管絃をもっぱらとし。春秋を松が根の。草の霧水のあわれ世の。心にもるる花もなし。心にもるる花もなし。すでにこの夜も夜半楽。声澄みわたる糸竹の。手向の琵琶を調ふれば。ふしぎやな晴れつる空かき曇り。にわかには降りくる雨の音。しきりに草木を払いつつ。時の調子もいかならん。いや雨にてはなかりけり。あれ御覧ぜよ。雲の端の月に並の岡の松の。葉風は吹き落ちて。村雨のごとくに音ずれたり。面白やおりからなりけり。大絃はそうそうとして。村雨のごとしさて。小絃はせっせつとして。ささめ言に異ならず。第一第二の絃は。さくさくとして秋の風。松を払って疎韻に落つ。第三第四の絃は。れいれいとして夜の鶴の。子を思つて籠の内に鳴く。鶏も心して。夜遊の別れとどめよ。一声の鳳管は。秋秦嶺の雲を動かせば。鳳凰もこれにめでて。桐竹に飛びくんだりて。翼を連らねて舞い遊べば。律呂の声声に。心声に発す。声文をなす事も。昔を返す舞の袖。衣笠山も近かりき。面白の夜遊や。あら面白の夜遊や。あら名残惜しの。夜遊や。

<カケリ>

あら名残惜しの夜遊やな。たまたま閻浮の夜遊に帰り。心をのぶるところに。修羅道の苦しみご覧ぜよ。また修羅の嗔恚が。おこるぞとよ恨めしや。さきに見えつる人影の。なお現わるるは経政か。あら恥かしや嗔恚の有様。はや人々に見えけるか。あの灯火を。消したまえとよ。灯火をそむけては。灯火をそむけては。ともに憐れ

む深夜の月をも。手にとるや帝釈修羅の。戦は火を散らして。嗔恚の矢先は雨とな
って。身にかかれば払う剣は。他を悩しわれと身を切る。紅波はかえって猛火とな
れば。身をやく苦患恥ずかしや。人には見えじものを。あの灯火を消さんとて。そ
の身は愚人夏の虫の。火を消さんと飛び入りて。嵐とともに灯火を。嵐とともに。
灯火を吹き消して。暗まぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊の形は。失せにけり。

半部（はしとみ）

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】内藤藤左衛門

【主人公】前シテ：里の女（面・増）、後シテ：夕顔の女の霊（面・増）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

京の都の紫野雲林院の僧が、九十日にわたる夏の修行も終わりが近づいたので、修行の間に仏に供えた花々の供養を行います。すると、白い花が開いたかのように、どこからともなく一人の女が現れて、花を捧げます。僧が女に名を尋ねると、ただ夕顔の花と答えるだけで、その名を明かしません。僧がさらに問いただすと、五条あたりの者とだけ言って、活けられた花の陰に消え失せてしまいます。

<中入>

僧が不思議な思いをしていると、ちょうどそのあたりの者がやって来て、光源氏と夕顔の物語を聞かせ、その女性は夕顔の幽霊であろうと述べて、僧に五条あたりへ弔いに行くことを勧めます。僧が五条あたりを訪ねてみると、荒れ果てた一軒の家に、夕顔の花が咲いています。僧が、夕陽が落ち、月がさし込むこの家の風情を眺め、『源氏物語』の昔を偲んでいると、半部を押し上げて、一人の女性が現れます。女は、光源氏と夕顔の花の縁で歌を取り交わし、契りを結んだ楽しい恋の思い出を物語り、舞を舞います。そして、夜明けを告げる鐘と共に僧に別れを告げ、また半部の中へ消えてしまいます。しかし、そのすべては僧の夢の中のことでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

折りてこそ。それかとも見ぬ。たそかれに。ほのぼの見えし。花の夕顔。花の夕顔。
花の夕顔。終の宿りは知らせ申しつ。常には弔らい。おわしませと。木綿附の鳥の
音。鐘もしきりに。告げわたる東雲。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと夕顔の
宿り。明けぬ先にと夕顔の宿りの。また半部の内に入りて。そのまま夢とぞ。なり
にける。

羽衣（はごろも）

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） *序ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞 [クセ] の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやってきました。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見回すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思いません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は仕方なく承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞 [クセ] の部分の抜粋）

春霞。たなびきにけり久かたの。月の桂の花や咲く。げに花かずら。色めくは春の
しるしかや。面白や天ならで。ここも妙なり天つ風。雲の通路吹きとじよ。乙女の
姿。しばし留りて。この松原の。春の色を三保が崎。月清見瀉富士の雪。いづれや
春のあけぼの。たぐい波も松風も。のどかなる浦の有様。その上天地は。何を隔て
ん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。君が代は。天の羽衣まれに
来て。なずともつきぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。声そえて数々の。笙笛琴篳篥。
孤雲のほかにみちみちて。落日の紅は。蘇命路の山をうつして。緑は波に浮島が。
拂う嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ。妙なる。

鵜飼（うかい）

【分 類】五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作 者】榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癡見）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと語り、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話を聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ墮ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

法華は利益深きゆえ。邪道に沈む群類を。救わんために来たりたり。げに有難き誓いかな。妙の一字はさていかに。それは褒美の言葉にて。妙なる法と説かれたり。經とはなどや名付くらん。それ聖教の都名にて。二つもなく。三つもなく。ただ一乗の徳によりて。奈落に沈み果てて。浮かみがたき悪人の。仏果を得ん事は。この經の利益ならずや。これを見かれを聞く時は。これを見かれを聞く時は。たとい悪人なりとも。慈悲の心を先として。僧会を供養するならば。その結縁に引かれつつ。仏果菩提に至るべし。げに往來の利益こそ。他を助くべき力なれ。他を助くべき力なれ。

三輪（みわ）

【分類】 四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：里女（面・曲見）、 後シテ：三輪明神（面・増女）

【あらすじ】（今回の舞囃子の部分…下線部）

大和国（奈良県）三輪山の麓に庵室をかまえている玄賓〔げんぴん〕僧都のもとへ、毎日櫛〔しきみ〕と鬘〔あか〕の水を持ってくる女があります。今日も、この淋しい庵を訪れた女は、罪を助けてほしいと、僧都にたのみます。そして、秋も夜寒になって来たので、衣を一枚いただきたいといいます。僧は衣を与え、女の住家を尋ねると、「わが庵は三輪の山もと恋しくば、とぶらひ来ませ杉立てる門」という歌があるが、その杉立てる門を目じるしにおいでなさい、といいすてて、姿を消します。

<中入>

里の男は宿願のため三輪明神に日参していますが、今日が満願の日に当り参詣すると、御神木の杉の枝に一枚の衣が掛かっています。見ると玄賓僧都の衣なので、不審に思い、早速僧都に知らせにやってきました。僧都が、この者に勧められて神前に来て見ると、いわれた通り、自分の衣が掛かっており、その裾に一首の歌が書いてあります。それを読んでいると、杉の木陰から御声がして、女姿の三輪明神が現われ、神も衆生も救うためしばらく迷い深い人間の心を持つことがあるので、罪を助けてほしいといい、三輪の妻問いの神話を語り、天照大神の岩戸隠れの神話を物語って神楽を奏しますが、夜明けと共に消えてゆきます。

【詞章】（今回の舞囃子の部分の抜粋）

さらば神代の物語。詳しくいざや現わし。かの上人を慰めん。まずは岩戸のその始め。隠れし神を出ださんとて。八百万の神遊び。これぞ神楽の。始めなる。千早ふる。

<神楽>

天の岩戸を引き立てて。神は跡なく入りたまえば。常闇の夜と。早なりぬ。八百万の神たち。岩戸の前にてこれを歎き。神楽を奏して。舞いたまえば。天照太神その時に岩戸を。少し開きたまえば。また常闇の雲晴れて。日月光かかやけば。人の面。白白と見ゆる。おもしろやと神のみ声の。妙なる始めの。ものがたり。思えば伊勢と三輪の神。思えば伊勢と三輪の神。一体分身のおん事。今さらなにと岩倉や。その関の戸の夜も明け。かくありがたき夢の告げ。覚むるや名残。なるらん。覚むるや名残。なるらん。

東北（とうぼく）

【分類】 三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：都の女（面・小面）、後シテ：和泉式部の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞[クセ]の部分…下線部）

東国より都へ上って来た旅僧が、東北院の和泉式部の住居跡を訪れます。折から花ざかりの一本の梅の木を見て、感じ入っていると、美しい一人の里女が現れて、話しかけてきます。そして、この梅は、今は「和泉式部」、「好文木」、「鶯宿梅」などさまざまに呼ばれているが、以前ここが上東門院の御所であった頃、和泉式部が植えて、「軒端の梅」と名付けたのだと、その由緒を語り、また、あの方丈は式部の寝所をそのまま残したものであると語ります。そして、花も、昔の主人である和泉式部を慕うかのように、年々に色も香も増して咲き続けているというので、旅僧が感心すると、自分こそ、この梅の主の和泉式部であると述べて、花の陰に消え失せます。

<中入>

旅僧は、門前の者からも和泉式部の物語を聞き、梅の木陰で夜もすから読経します。すると、式部の霊が、ありし日の美しい上臈の姿で現れます。そして、昔、御堂関白藤原道長が、今あなたが読誦している法華経を高らかに誦しながら、この門前を通られるのを聞いて、「門の外 法の車の音聞けば われも火宅を 出でにけるかな」と詠んだが、その功德により、死後、火宅の苦しみをのがれ、歌舞の菩薩になったと語ります。さらに和歌の徳や、東北院の霊地であることを讃え、美しい舞を舞って、やがて暇を告げて方丈に入ったかと思うと、僧の夢は覚めます。

【詞章】（仕舞[クセ]の部分の抜粋）

所は九重の。東北の霊地にて。王城の鬼門を守りつゝ。悪魔を払う雲水の。水上は山陰の鴨川や。末白河の浪風も。潔きひびきは。常楽の縁をなすとかや。庭には。池水を湛えつゝ。鳥は宿す池中の樹。僧は敲く月下の門。出で入る人跡かづかづの。袖をつらね裳を染めて。色めく有様はげにげに花の都なり。見仏聞法の数数。順逆の縁はいやましに。日夜朝暮におこたらず。九夏三伏の夏たけて秋きにけりと驚かす。潤底の松の風。一声の秋を催して。上求菩提の機を見せ。池水に映る月陰は。下化衆生の相を得たり。東北陰陽の。時節もげにと。知られたり。

富士太鼓（ふじだいこ）

【分類】四番目物（狂女物） *楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：富士の妻（面・曲見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

萩原の院（花園天皇）の時代に、宮中での七日の管弦の時に天王寺から浅間という太鼓の楽人が召されました。しかし、住吉の太鼓の楽人、富士もまたその役を望んで都に上ります。管弦の役は浅間に決まりましたが、浅間は富士の差し出た振る舞いを憎み、殺害してしまいます。そのような事があったとは露とも知らない富士の妻は、夫の帰りが遅いのを案じ、子を伴って都に上り、尋ねます。そして、初めて富士が討たれたのを知り、その形見の装束を渡されますが、悲嘆のあまり一時は心も狂わんばかりとなり、見るも哀れな姿となってしまいます。妻は、夫の出立前に止めたことを語り、このように夫が果てたのもあの太鼓のゆえだとして、打って怨みを晴らすべしと子と共に、太鼓を敵と見てこれに打ちかかります。そうするうちに妻は、夫の幽霊が乗り移ったかのように、持っている撥を剣と定めて、太鼓を敵と見て、怒りの炎のように太鼓を打ちます。そして、その後、悲しみの楽を奏し、夫の形見を持って、泣く泣く故郷の住吉に帰って行きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

持ちたる撥をば剣と定め。持ちたる撥をば剣と定め。瞋恚の焰は太鼓の烽火と。天にあがれば雲の上人。真の富士おろしに。絶えずもまれて裾野の桜。四方へ。ぱつと散るかと思えて。花衣さす手も引く手も。伶人の舞なれば。太鼓の役はもとより聞こゆる。名の下むなしからず。たぐいなや懐かしや。げにや女人の悪心の。煩惱の雲晴れて五常樂を打ちたまえ。修羅の太鼓は打ちやみぬ。この君のおん命千秋樂を打とうよ。さてまた千代や万代と。民も榮えて安穩に。太平樂を打とうよ。日もすでに傾きぬ。日もすでに傾きぬ。山の端を眺めやりて。招き返す舞の手の。嬉しや今こそは思う敵は討ちたれ。打たれて音をや出だすらん。われには晴るる胸の煙。富士が恨みを晴らせば。涙こそうなかりけれ。これまでなりや人人よ。暇申してさらばと。伶人の姿鳥兜。みな脱ぎ捨ててわが心。乱れ髪乱れ笠。思いはいつか忘れんと。また立ち帰り太鼓こそ。思えば夫の形見なれと。見おきてぞ帰りける。あと見おきてぞ。帰りける。

善知鳥（うとう）

【分類】四番目物（執心物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・尉面）、後シテ：獵師の亡霊（面・瘦男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国一見の僧が、陸奥国（青森県）外の浜への行脚を志し、途中、越中国（富山県）立山に立ち寄り、目のあたりに地獄の光景を見て感慨を催し下山します。すると一人の老人が呼びかけて、外の浜へ下ったら、去年の秋に死んだ獵師の宿があるから、その妻子を訪ね、そこにある蓑笠を手向けてくれるように頼み、その証拠にと、自分の着ていた麻衣の片袖を引きちぎって渡します。

<中入>

片袖を持って旅僧は奥州へ下り、外の浜に着くと、土地の者に獵師の家を尋ねます。教えられた家へ赴き、獵師の妻と子供に、立山で会った老人の片袖を渡し、伝言を伝えます。妻は衣を取り出し、それに合せると、まさしく亡き人の形見とぴったり合います。そこで妻子はおどろき懐しみつつ、蓑笠を手向け、僧と共に回向します。すると、獵師の亡霊が現れ、生前多くの鳥獣を殺した重い罪科を仏の力で消滅させてくれるように頼みます。妻子は獵師の姿を見て泣くばかりです。獵師が我が子に近寄り髪を撫でようとすると、雲霧に妨げられて子供の姿が見えなくなります。獵師は生前の殺生を悔い、善知鳥を捕える時の様子を物語り、その報いで今は地獄に落ちて苛責を受けていると様を見せ、この苦しみを助けてほしいと言ったかと思うと、消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

親は空にて血の涙を。親は空にて血の涙を。降らせば濡れじと管簔や。笠を傾けこ
こかしこの。便りを求めて隠れ笠。隠れ簔にもあらざれば。なお降り掛かる血の涙
の。目も紅に染み渡るは。紅葉の橋の。かささぎか。娑婆にては。善知鳥やすかた
と見えしも。冥途にしては化鳥となり。罪人を追っ立て鉄の。嘴を鳴らし羽を叩き。
銅の爪を。研ぎ立てては。眼を掴んでしむらを。叫ばんとすれども猛火の煙に。
むせんで声を。上げ得ぬは。鴛鴦を殺しし咎やらん。逃げんとすれど。立ち得ぬは。
羽抜け鳥の報いか。善知鳥はかえって鷹となり。我は雉とぞなりたりける。のがれ
交野の狩り場の吹雪に。空も恐ろし地を走る。犬鷹に責められて。あら心うとうや
すかたやすき隙なき身のくるしみを。助けて賜べや御僧。助けて賜べや御僧と。い
うかと思えば。失せにけり。

船弁慶 (ふなべんけい)

【分類】五番目物(怨霊物) *中ノ舞(前シテ)、舞働(後シテ)

【作者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：静御前(面・小面)、
後シテ：平知盛の怨霊(面・怪士〔あやかし〕)

【あらすじ】(今回の舞囃子の部分…下線部)

源義経は、平家追討に武功を立てますが、戦が終わると、かえって兄頼朝から疑いをかけられ、追われる身となります。義経は、弁慶や従者と共に都を出、攝津国(兵庫県)大物浦から西国へ落ちようとしています。静御前も、義経を慕ってついて来ますが、弁慶は時節柄同行は似合わしくないから、都へ戻すように義経に進言し、了承を得ます。弁慶は静を訪ね、義経の意向を伝言しますが、静は弁慶の計らいであろうと思い、義経に逢って直接返事をするといいます。義経の宿に来た静は、直接帰京をいわたされ、従わざるを得ず、泣き伏します。名残りの宴が開かれ、静は、義経の不運を嘆きつつ、別れの舞を舞います。やがて出発の時となり、涙ながらに一行を見送ります。

<中入>

弁慶は、出発をためらう義経を励まして、船頭に出発を命じます。船が海上に出ると、にわかに関風が変わり、激しい波が押し寄せて来ます。船頭は必死に船をあやつりますが、吹き荒れた海上に、西国で滅亡した平家一門の亡霊が現れます。中でも平知盛の怨霊は、自分が沈んだように、義経を海に沈めようと長刀を持って襲いかかって来ます。義経は少しも動ぜず戦いますが、弁慶は押し隔てて、数珠を揉んで祈ります。祈られた亡霊は、しだいに遠ざかり、ついに見えなくなります。

【詞章】(今回の舞囃子の部分の抜粋)

悪逆無道のそのつもり。神明仏陀の冥感にそむき。天命に沈みし平家の一類。[主上をはじめたてまつり.] 一門の月卿雲霞の如く。浪に浮かみて。見えたるぞや。そもそもこれは。桓武天皇九代の後胤。たいらの知盛。幽霊なり。あら珍らしやいかに義経。思いもよらぬ。浦浪の。声をしるべにいで舟の。声をしるべにいでぶねの。知盛がしずみしその有様に。又義経をも海に沈めんと。いう浪に浮かめる長刀取直し。巴浪の紋あたりを払い。うしおをけたて悪風を吹きかけ。まなこもくらみ。心もみだれて。前後を亡ずるばかりなり。

<働二段>

そのとき義経すこしもさわがず。その時義経すこしもさわがず。うちのぬき持ちうつつの人に。向うが如く。ことばをかわし戦い給えば。弁慶おしへだて。うち物わぎにて叶うまじと。数珠さらさらとおしもんで。東方降三世南方軍陀利夜叉。西方大威徳。北方金剛夜叉明王。中央大聖不動明王のさっくにかけて。祈りいのられ

悪霊次第に遠ざかれば。舟慶舟子に力をあわせ。お舟を漕ぎのけみぎわによすれば、
なお怨霊は。したい来たるを。追っばらい祈りのけ、また引く汐にゆられ流れ。ま
たひく汐にゆられ流れて。あと白波とぞ。なりにける。

八重桜（やえざくら）

【分 類】初番目物（脇能物） ＊神舞

【作 者】不詳

【主人公】前シテ：宮守ノ翁（面・小尉）、後シテ：水谷神（面・大天神）

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

のどかな春のある日、都の天皇に仕える臣下が、奈良の春日大社に参詣します。境内には、八重桜を仰ぎ愛でていた老人が一人、立ち去る気配はありません。臣下はそのわけを尋ねると、これが古人が「いにしへの 奈良の都の 八重桜 今日九重に 匂いぬるかな」という歌に詠んだ八重桜であると言い、春日大社の起こりについて詳しく語り始めます。そして我こそ水谷〔みずや〕神社の神の化身であることをほのめかして姿を消します。

<中入>

その夜のこと、臣下がゆめうつつの状態していると、水谷の神様が現れます。八重桜が咲き誇るなかで、平穩に栄える世を寿ぐのでした。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

殊更時も相に逢。春の気色も一入に。匂い満ちくる桜木の。花の盛りは面白や。げに面白き桜木の。花も色そう春日野の。三笠の森の草も木も。枝をならさぬ。時津風。吹きおさまれる御代なれば。国富み民も豊かに。万歳を呼ぼう三笠山。千秋の春の日の。曇らぬ御代ぞ久しき。曇らぬ御代ぞ。久しき。

加茂（かも）

【分類】初番目物（協能） *舞働

【作者】金春禅竹

【主人公】前シテ：水汲女（面・増女）、後シテ：別雷の神（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）の室の明神と都の加茂明神とは御一体であるというので、室の明神に使える神職が都へ上り、加茂の社に参詣します。すると、その川辺に新しい壇が築かれ、白木綿に白羽の矢が立ててあります。それを見て、不審に思い、ちょうどそこへ水を汲みにやって来た二人の女に尋ねます。女は「昔、この里に住んでいた秦の氏女が、朝夕この川の水を汲んで、神に手向けた。ある時、川上から白羽の矢が流れてきて水桶に止まったので、持ち帰って家の軒にさしておくと懐胎して男子を産んだ。この子と母、そして白羽の矢で示された別雷〔わけいかづち〕の神を加茂三社の神というのです」と、加茂三社の縁起を語ります。続いて、水を汲みながら川に因んだ歌をひき、その流れの趣を語り、やがて自分が神であることをほのめかして消え失せます。

<中入>

しばらくして、女体の御祖神〔みおやのしん〕が姿を現して舞をまい、続いて別雷の神が出現して、国土を守護する神徳を説き、猛々しい神威を示した後、御祖神は糺の森へ、別雷の神は虚空へと飛び去っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋です。）

風雨隨時の御空の雲居。風雨隨時の御空の雲居。別雷の雲霧をうがち。光稻妻の稲葉の露にも。宿る程だに鳴る雷の。雨を起して降りくる足音は。ほろほろ。ほろほろとどろとどろと踏みとどろかす。鳴神の鼓の。時もいたれば五穀成就も国土を守護し。治まる時にはこの神徳と。威光を現わしおわしませば。御祖の神は。糺の森に。飛び去り飛び去り入らせたまえばなお立ちそや雲霧を。別雷の。神も天路によじのぼり。神も天路によじのぼって。虚空にあがらせ給いけり。

敦盛（あつもり）

【分 類】二番目物（修羅物＝公達物） *中ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：草刈男（直面）、後シテ：平敦盛の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

一ノ谷の合戦で、当時十六歳であった平家の公達平敦盛を討ち取った熊谷直実は、あまりの痛ましさに、無常を感じ、武士を捨てて出家して蓮生と名乗ります。彼は敦盛の菩提を弔うため、再びかつての戦場、摂津国（兵庫県）一ノ谷を訪れます。すると、笛の音が聞こえ、数人の草刈男がやって来ます。その中の一人と笛の話をしているうちに、他の男達は立ち去りますが、その男だけが残っているので、蓮生が不審に思って尋ねると、自分が敦盛の霊であることをほのめかして消え失せます。

<中入>

蓮生は、散策にやって来た須磨の裏の男に、一ノ谷の合戦、敦盛の最後について語ってもらいます。そして、自分は熊谷次郎直実であり、今は出家して敦盛の菩提を弔っているのだと明かします。そう聞いて、土地の男は感心し、敦盛の回向をするように言って立ち去ります。蓮生が夜もすがら念仏を唱え、その霊を弔っていると、武者姿の敦盛が現れ、平家一門の栄枯盛衰を語り、笛を吹き、今様を謡った最後の宴を懐かしんで舞います。続いて敦盛は討死の様子を見せ、その敵に巡り会ったので、仇を討とうとしますが、後生を弔っている今の蓮生はもはや敵ではないと、回向を頼んで消え去ります。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

さる程に。御船を始めて。一門の皆みな。我もわれもと舟に浮かめば。乗りおくれじと。汀にうち寄れば。御座船も兵船もはるかにのび給う。せん方なみに駒を控え。あきれ果てたる。有様かな。かかりける所に。かかりける所に。後より。熊谷の次郎直実。のがさじと追かけたり。敦盛も。馬引っかえして。波の打物ぬいて。二打ち三打ちは打つとぞ見えしが馬の上にて。引つ組んで波打ち際に。落ちかきなつてついに。打たれて失せし身の。因果はめぐり合いたり。敵はこれぞと打たんとするに。仇をば恩にて。法師の念仏してとむらはるれば。ついには誰も生まるべし。同じ蓮の蓮生法師。敵にてはなかりけり。あととむらいてたび給え。あととむらいてたびたまえ。

井筒 (いづつ)

【分 類】三番目物 (鬘物) *序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女 (面：小面)、後シテ：井筒の女の霊 (面：小面)

【あらすじ】(仕舞の部分…下線部)

諸国一見を志す旅僧が、奈良から初瀬へ行く途中、在原寺を訪れ、業平とその妻を弔います。するとそこへ、一人の里女が現れ、井戸の水を汲み上げ、古塚に手向けています。僧がいぶかって尋ねると、それが業平の墓であることを教えるので、業平のゆかりの者かとただすと、女はそれを否定しつつも、問われるままに次のような事を語ります。業平は紀有常の娘と浅からず契りながらも、一時、高安の里の女の許に通っていたが、「風吹けば 沖つ白波 龍田山 夜半にや君が 独り行くらん」という歌を詠んで、自分の身を案じてくれる妻の真心にうたれて、元に戻った話や、幼い頃、この井筒のそばで二人遊びたわむれたが、幼馴染の親しさが長じて恋となり、「筒井筒 井筒にかけし まろが丈 生ひにけらしな 妹見ざる間に」「比べこし 振分髪も 肩過ぎぬ 君ならずして 誰か上ぐべき」と歌を詠みかわして夫婦となった話などをします。そして、自分こそ井筒の女と呼ばれた有常の娘だと名乗って、井筒の陰に姿を消します。

<中入>

旅僧は来合せた櫛本の者からも業平夫婦の話聞き、先の女は有常の娘の化身であるから弔ってやるよう勧められます。旅僧は、回向をし、夢の出会いを期待して仮寝します。すると井筒の女の霊が、業平の形見の衣裳をつけて現れ、舞を舞い、我が姿を井筒の水に映して業平の面影をなつかしみますが、やがて夜明けと共にその姿は消え、僧の夢も覚めます。

【詞章】(仕舞の部分の抜粋)

ここに来て。昔を帰す。ありわらの。寺井に澄める。月ぞさやけき。月ぞさやけき。月やあらぬ。春や昔と詠めしも。いつのころぞや。筒井筒。筒井筒。井筒にかけし。まろが丈。生いけらしな。老いにけるぞや。さながら見みえし。昔男の。かむり直衣は。女とも見えず。男なりけり。業平の面影。見れば。懐かしや。われながら懐かしや。亡夫魂霊の姿は。萎める花の。色無うて匂い。残りて在原の。寺の鐘もほのぼのと。明くれば古寺の。松風や芭蕉葉の夢も。破れて覚めにけり。夢は破れ。覚めにけり。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管):竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓:台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるものです。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡います。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態です。

独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するものです。演者は紋付袴姿です。

連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するものです。演者は紋付袴姿です。

仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞うものです(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞います。仕舞扇をしていますが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いませぬ。シテ一人で演じるのが普通ですが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもあります。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされています。

舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うものです。平均して10~20分程度の長さになります。長刀や杖などの手道具は用いますが、作り物(大道具)は省略します。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となりましたが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされています。

袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるものです。

半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるものです。

独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもののことをいいます。

一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するものです。

一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合があります。

素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるものです。

番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるものです。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞。

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも速く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽[かぐら]: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踏的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。
働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>